

平成 26 年度 大阪府立芦間高等学校 第 2 回 学校協議会

日 時 平成 26 年 10 月 11 日 (土) 午後 2 時 00 分～午後 4 時 50 分
場 所 本校 2 階 会議室
構成員 <協議会委員>

高松 真由美 P T A 会長
竹田 晴彦 守口市立第一中学校 校長
藤田 俊和 後援会会長
前川 新三郎 近畿大学教職教育学部 教授
宮坂 政宏 教育 P R O 編集主幹
山崎 裕也 スクール I E (塾) 京阪エリアマネージャー

<事務局>

山下 尚紀	教頭	山田 英章	事務長
甲斐 徹	首席 兼 情報部長	辻 真人	首席 兼 総務文化部長
塩崎 靖子	指導教諭	若林 博行	教務主任
松本 清豪	生徒指導主事	阿野 高明	進路指導主事
岸本千都子	保健主事	飯尾 勝紀	第 1 学年主任
杉野 正	第 2 学年主任	長尾 麻里	第 3 学年主任
西 禎憲	支援教育コーディネーター		
(大西利男)	(校長)		

- 配付資料 1 平成 26 年度 大阪府立芦間高等学校 第 1 回学校協議会 議事録
2 平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価
3 授業力向上等についての取組み 及び 関連資料
4 平成 26 年度 第 1 回 授業アンケート 集計結果
5 平成 26 年度 第 1 回 授業アンケート結果を踏まえた各教科の振り返り
6 進路指導関連 目標の実現に向けた取組み
7 遅刻回数減少プロジェクトの取組み
8 新広報誌『芦間ニュース』
9 まなびバ！（朝日新聞）のコピー

内 容

- (1) 学校長挨拶
- (2) 会長挨拶
- (3) 報告

平成 26 年度学校経営計画の進捗状況について

- 授業力向上等についての取組み
- 進路指導関連 目標の実現に向けた取組み
- 遅刻回数減少プロジェクトの取組み
- その他の内容についての取組み

(4) 協議

<「授業力向上等についての取組み」「進路指導関連 目標の実現に向けた取組み」について>

委 員：アクティブ・ラーニングを推進するための前段階として、教員のジェネリック・スキル（社会に通用する力）が大切であり、アクティブ・ラーニングの形式だけを追い求めてはいけない。また、アクティブ・ラーニングを学校において導入するに当たっては、それを支えるカリキュラムの構成と教科横断的に取組む姿勢が必要である。そして、カリキュラムの中で具体的な実践に落とし込むことが肝要である。また、文部科学省は、大学入試を大学教育・高校教育と一体化させて改革しようとしており、定量的ではなく定性的な判断基準に変えようとしている。高校においては、そのことともリンクさせて、今後の授業の在り方を議論する必要がある。授業アンケートに関しては、肯定的な内容が多くあり、よかったと思う。ただ、数値だけに惑わされず、アクション・リサーチという手法のように、日々の授業の振り返りを蓄積・充実させて、日々の授業の改善をこまめに行っていく必要がある。また、生徒の授業への満足度が高くても、生徒の授業への期待度と方向性がずれてはいけない。そして、生徒の授業への期待度を高める努力をするべきである。また、エビデンス（根拠）をしっかりと持っていれば、生徒の授業への満足度が仮に低くても大丈夫であると考えてよい。



委員：ICTを活用した授業には、興味がある。実際、効果的な取組みがどの程度なされているのか。生徒の反応はどうか。私は、黒板に書いたものを丁寧に写していた。また、科学の実験は、わくわくしたものだった。先ほどの二次関数のグラフの説明にICTを活用した実践事例は、インパクトがある内容であった。また、ICT活用への生徒たちの意識が気になる場所である。ICTは、上手く使わないと、逆に印象に残らないようになる恐れもある。そのあたりをどう工夫しているのか、お聞きしたい。

事務局：ICT活用授業については、現在、若手教員中心に実践していただいている。おそらく、小・中学校でのICT活用がかなり進んでいると考えられるので、生徒の反応はそれほど特別なものがあるという感はない。分かり易い説明をするための道具として、生徒は自然に受け止めている。チョークによる板書よりも、綺麗な図が描けて、しかも早く進められるので、授業の進行もしやすい。理科の実験にも活用できれば、時間の有効活用ができる。実験を前もって行って、その場面をカメラに写して、その映像をクローズアップして生徒に見せて効果を上げている。活用時間も、5分～15分程度で、ワンポイント的にICTを使用している場合が多い。

委員：守口の小学校では、5・6年生で、タブレットパソコンを利用している。中学校には電子黒板が入っている。例えば、英語の授業で、スカイプを活用し、ALTのカナダにいる家族と同時中継で英会話を行うという取組みなど、ICT活用によって効果が上がる取組みが増えている。全般的には、タブレット活用が増えているようである。

委員：今の子どもは字を読まない。数学でも途中の式を書かない。漫画も読まない子どもがいる。ネットを活用し、ビジュアルで理解している。ビジュアルだけでは、じっくり考える力が付かないことも多い。年々、想像力や考える力が弱くなっているような気がする。例えば、社会科で、世界遺産などの映像を見せると、生徒の食いつきはよい。うまく考える力が付くように活用できればいいと思う。ただ、ICTばかりに頼りすぎると、印象が薄まるのではないかと懸念する。

事務局：ICTは、単に使えばよいというものではない。どの場面においてどのように効果的に使うのかなど、使う場面を工夫・精選していくことが大切である。

委員：関東の中学校の理科の授業において、慣性系で物体を落下させたらどうなるか、つまり、特急の電車から物体を落とすとどこへ落ちるのかを考えさせる場面で、グループワークとICT活用を併用する取組みを見せていただいたことがある。また、天体に関する説明を黒板で行うと生徒にとっては難しいが、映像を見せると、イメージが容易にでき、生徒はすぐに理解できる。ICTを活用する場合は、教員側の使用意図を明確化することが大切である。また、グループワークの醍醐味を教員側が共有化することも大切である。それぞれの教科・科目で、何を活かして何を共有化して取り組むことができるかという視点をもつことが大切である。若い人の使えるICT活用実践資料を蓄積して残していって、それを継承して活用していくのがよい。若手の教員からICT活用の輪が広がっていくことはよいことである。

次に、家庭学習についてである。「宿題を必ずさせる」という取組みについての話をしたい。「宿題をやってこなかったら、生徒も先生もたいへんだ。」という授業実践がある。学校が出した宿題を先生方が是が非でも生徒に提出させる。先生方も生徒もたいへんだが、それを実践している学校がある。この宿題をこなせば、どういうことにつながるかを考えさせる。例えば、この問題集さえやれば、私立中堅大学には行けるとか、家庭学習でこれだけのことをやれば〇〇大学の〇〇という教科は制覇できるなど、学校として共通のことを持って生徒に示せば、生徒にとっては分かりやすい。その他、グループワークで理解を深める実践を学校としてやってみるなど、授業の面白さを大事にして取り組んでいくことが大切である。府立の〇〇高校では、グループワークの取組みで授業内容を深めている。授業の本筋の面白さを生徒に提供できるよう、本気で取り組んでいる学校である。

委員：中学校では、全国学力テストがあり、職員の授業改善への一体化をめざし、めざす数値目標を提示し、それが浸透するよう、管理職による授業見学を充実させている。高校では、授業見学はどれくらい行っているのか。

事務局：全員分は1回である。全員分を2回見るのは、物理的・時間的に無理である。希望者等について、2回目の見学を実施している。

- 委員：今年は2回見ている。教員の方から見てほしいと思う授業を申し出させて、その授業を見に行くようにしている。若い教員からは、管理職に授業を見ていただいてありがたいという反応が多い。
- 委員：保護者の立場から言うと、保護者集会（土曜日開催）が年2回あることがまだまだ保護者に伝わっていない。体育祭や文化祭のときなど、お知らせポスターを作成したり、保護者が来校するときに案内プリントを配布したり、また、メルマガの登録方法や手順を教えるようなことも考えていただきたい。土曜日は、休みの保護者も結構多いので、保護者集会に参加したい人は多いと思う。特に、2年生や3年生の保護者は、進路の話を聞く機会がもっとほしいと思っている。手紙やお知らせが届けば、進路指導の満足度も上がると思う。
- 事務局：メルマガをより効果的に使って、案内を充実させていきたい。
- 委員：さきほど、休憩時間中に、塾の先生とお話をさせていただいたとき、私学には特進コースがあるが、芦間の生徒がその特進コースに行ったとき、難関大学に行く確率は高いかとお聞きしたら、高いのではないかというご返事であった。芦間は、芦間ならではの人間教育（キャリア教育）のよさがある。もちろん、学業もするが、人間的成長を促すために、行事も充実している。進学指導だけではない芦間高校の魅力をもっと発信をすることが大切である。もっとクリアーにそのあたりのことを広報しないと、私学の特進コースのような大学進学の結果だけで判断がなされ、保護者は私学への進学を勧めることになってしまう。平成28年度からの選抜制度の変革を見据えて、総合学科としての魅力を打ち出し、無視することができない「なるほど」という人間教育（キャリア教育）を明確化して、普通科との違いを出すことが大切である。
- 事務局：科目「産業社会と人間」の中で行っているキャリア教育が本校の教育活動の核である。この科目で、科目選択と絡めて、近い未来と遠い未来を考えさせている。このことは、保護者にはアピールできていると思う。
- 委員：近隣の中学生や保護者からは、芦間高校は、中間層で、頑張ればいい大学に行けるというイメージを持っていたいただいていると思う。しかし、「産近甲龍に行くには」「〇〇大学に行くには」など、1年次から現実の厳しさをはっきりと伝えるべきではないだろうか。「決して、甘く考えてはいけない。」という現実を教えるべきではないだろうか。
- 委員：中学生が進学先高校を選ぶ場合、自宅から近いというのが一番の理由である。私学の高校のセールスが激しくなっている。選抜制度の変更に対応するためにも、芦間高校の特徴をしっかりと伝えてほしい。
- 委員：総合学科の魅力や芦間高校の抜きん出たものを保護者や生徒にもっと伝えなければいけない。広報の面でも勝負どころの時期である。学校の生き残りがかかっていると言える。



＜「遅刻回数減少プロジェクトの取組み」について＞

委員：遅刻指導の在り方に関して、他校へ視察に行ったということだが、芦間の指導のやり方はどうなっているのか。

事務局：3回目から指導に入っている。学年によっては、1回目から指導を行っている。

委員：このデータを見ると、1日に10数人の遅刻者があるということになる。

委員：1年間で2500件というのは遅刻者が多い、という認識の上に立ってのプロジェクトなのか。

事務局：一般的な感覚としては、多くないと言ってもいいかもしれない。しかし、府教育委員会が示しているデータによると、本校のような比較的落ち着いた学校をグルーピングした場合、本校は多い方に入る。

委員：高校生にとっては、その高校は自分で選んだ学校。遅刻とは何か。ネガティブな数字を突き付けること。理屈で、1回目からでも遅刻したらダメだ、ということを単純に分からせることが大切。

委員：遅刻は、特定の生徒が多いのだろう。取組みを広報誌に掲載できるようにすることが必要である。外部から見て、よい結果が出たと思わせること。教育にとって大事なデータを広報誌に掲載すること。遅刻を0にすれば、保護者の評価が変わる。同様に、芦間の過去を振り返ると、以前は、関関同立への進学者数はそれほど多くはなかったと思うが、今はある程度の人数が進学している。それを視覚的に分かるようにすれば、芦間は急速に変わってきていることが分かる。保護者にすれば、出口が確保されているということで安心する。それらのことと、総合学科としての評価があれば、芦間が確実に変化していることが分かる。「勉強ばかり」ではない保護者もいる。「勉強ばかり」は私学へ行けばいい。芦間というよさをどう打ち出すか、そのための取組みが必要である。

委員：家庭環境が影響している部分もある。また、芦間高校は、女生徒のスカートも短くないし、安心して通わせられる学校である。学校によっては、恥ずかしいような学校もあり、そういった雰囲気や校風の学校もある。それに比べて、芦間は、保護者以外の方が見ても安心できる。細かなことかも知れないが、遅刻が確実に減少するよう、学校としてしっかりと力を尽くしてほしい。

(5) 事務連絡

第3回は、平成27年2月14日（土）の午後に開催予定。